

森へようこそ、幸せって何でしょう

NPO 森づくりフォーラム
代表理事 内山 節

1. はじめに

私の生まれは東京の世田谷です。小さいころから魚釣りをやっていて、何時からか山奥の溪流釣りが中心になりました。群馬県の上野村へ行ったら何となくこの村が気に入って、この村で暮らすのもいいかなと、一応の家と 200 坪くらいの畑と裏山を持っていて、本当はそんな暮らしをしたいのです。ただ仕事の都合がありますので、東京に居たり上野村に居たり、そんな生活を続けています。あと 5 年で 50 年程になるので、気分的にはすっかり上野村の人間です。

元々私は森林について詳しくは無いのですが、上野村で村の人たちが今の頃ですとキノコを採りに行くとか、春先ですと山菜取りに行くとか、夏の前頃には胡瓜とか蔓性の物を作っているので支柱を取りに山へ行くとか、その度に私は興味があるので連れて行ってもらったりしながら森についていろんなことを教えてもらいました。本来は哲学なのですが何時の間にか、この 7-8 年ぐらい、東京大学農学部で森林関係の授業を持っています。

森というのは、皆にとって同じ森が在るのかということそうでもないのです。8 月ごろに村の人たちが遠くの方をボーッと見ている時があります。松茸が生えるかどうか見ている。松茸は木が混みすぎても出ないし、風通しが良すぎても出ない。8 月に入ったころに何となく見ていると可能性のある場所が幾つか見つかると、秋に行ってみる。森は村の人間からすればいろんな利用の仕方をします。どのような利用が可能なのかという目で見ます。松茸の時期の前、8 月から 9 月頃山に入ると、トチバンニンジンという草が出ます。滅多に見つかりませんが、あれば 5-6 本まとめて生えています。日本在来の朝鮮人参で、朝鮮人参のように根は太くなりませんが、同じような効果があると言われていました。これを見つければ、しめたということになります。ソ連が昔、世界で初めての有人宇宙船ソユーズを打ち上げた時、宇宙飛行士が体力を保つために強壯剤を持って行ったらいいのですが、その強壯剤が日本から輸入した野生人参、トチバンニンジンだったということです。トチバンニジンは滅多に見つかりませんが、そのぐらい良いものだという事です。村の人たちは何となくそんなものを採りながら山を歩いているところがあります。その人達と観光に来た人達が同じ森を見ている、同じ森に見えるかという点とやはり違うと思います。

どちらが良いということではないのですが、私でも沖縄の森を見てみるとさっぱり分からない感じがします。木の種類が違うだけではなく、人々のその森への関わり方が全然分からないのです。本州の森であれば、この木は建築材に使うとか、様々なことが想像出来るのです。沖縄まで特に石垣とか、西表とか八重山へ行くと本当にどう関わっていいか分からないのです。森は人間の関わり方によっていろんな森が存在すると考えて良く、誰にとっても同じ森が在るわけでは無いと思うのです。

実際日本の森は凄く複雑で、亜熱帯性の森から寒帯性の森までありますし、一気に山を駆け上がるような地形もあり、高山帯の森から海岸林まで存在します。そしてまた、人間が関わってきたという点でも、旧里山のような薪を取ることを主目的にした山もあるし、防風林的なところもあります。防風林でも、この辺であれば昔の旧家のように屋敷周りに大きな木の垣根を作って済んでいるでしょうが、青森県津軽半島の屏風岩というところでは冬に日本海から強烈な北風が吹くので幅が 2 キロぐらいもある海岸防風林の松林があります。うっかり中に入ると迷子になりそうです。特に日本海側は冬に北風が吹きつけるので、津軽から下関まで様々な時代を通してずっと海岸林を作って村々を守ってきた歴史があります。

東京とか埼玉の台地状の農村では、水がないので水田に適していません。堆肥を作る原料の稲わらがないので農村ができるのが遅くなります。麦を作っても麦わらは腐りづらく堆肥作りには適していません。東京でも多摩地域とか世田谷辺りでも、台地になっているところは農村作りが江戸時代になります。それまでは馬の放牧などで人は住んでいたのですが、本格的な農村ができるのは江戸時代に入

ってからになります。肥料が無かったのが大きな原因です。江戸時代になりますと江戸という 100 万都市ができます。周辺に農村を作って野菜などを供給できるようにしました。そのときの肥料は、葉っぱが沢山落ちるような木で雑木林を作り落葉で堆肥を作るようにしました。関東台地の農村では 1 ヘクタールの農地に対して同じぐらいの広さの雑木林を作り、落ち葉を集めては堆肥を作っていました。落ち葉の落ちやすい木というのはこの辺ではクヌギとか欐とか、東京でももう少し寒いところではコナラが多くなってきますが、そうやって雑木林を作って農業に利用してきました。このようにいろんな形で人間たちが森に関わって行ったし、また人が関わることによって森も変わって行くので、そこには多様な森が出来ていったのです。そもそも自然のままでも日本のいろんな気候風土により多様な森があり、そのような社会を作っていたのです。

2. 関係が作り出してきた世界について

自分たちが森とどういう関係を作っているのかによって見えて来るものが変わってきます。この事が意味しているのは、どういう関わり方をしているかによって現れて来る世界が変わってくることです。日本は、明治以降になって西洋のものの考え方が沢山入ってきたので、今となっては一般的には日本人も考え方の半分以上は西洋的な考え方をしていると言えます。私たちが今使っている言葉もそうです。明治 20-30 年代に外国の文献から沢山翻訳書を作りました。そのお陰で外国のいろんなものが日本語で読めるようになったのですが、その時日本語に適当な単語が無い場合が多く、多くの単語を翻訳するために新たに作ったのです。その結果、私たちが今物事を考えようとすると明治に作られた言葉を使わないと考えられなくなってしまったのです。

英単語の「Nature」に相当する「自然」という単語も明治まではありませんでした。当時は自然と人間を区別していなかったのです。あの人がいるように、あの森が有り、あの木が有り、あの動物が居たりするということで、とくに区別する必要が無かったのです。結局「じねん」と読んでいた言葉を翻訳語に当てはめたのです。「社会」という言葉もこの頃に出来た言葉です。日本語で一番近い言葉は「世間」という言葉だったのですが、「そんな事したら世間様が許さない」というように「世間」という言葉はシステムを持っているわけでは無く、「世間」の中には人間も居るし自然もあるし、上からはお天道様が見ているみたいな、そういう世界です。それに対して西洋の「社会」は契約で作られている社会システムの構造なので、「世間」というとちょっと違う、ということで「社会」という新しい言葉を作るようになったのです。

今日の会話は明治に出来た単語を乱発して会話しています。そういう思考様式になっていると考えられます。自分たちの生きている世界を、世間ではなく社会として捉えるようになっていきます。人間の外側にあるものとして自然を捉えています。発想がだいぶ欧米的になったと言えます。

その一方において昔ながらの日本的な発想が見直される時代にも入ってきています。私が大学院にいた時の学生がケニアに行ってナイロビ大学の学生と交歓した時の話です。谷崎潤一郎の「陰翳礼賛」が、いかに内容が素晴らしいかという話をナイロビ大学の学生から教わって帰ってきた、と話していました。「陰翳礼賛」というのは一種の日本文化論ですが、日本文化が光と影によっていかに形成されて来たかを書いた本です。最後の方では、光と影によって作られていた社会がだんだん単に明るい社会に変って来た。昔のお手洗いは微かに電球の明かりがあつたりしますが、大半は暗い世界です。今の水洗便所になるとピカピカに明るい世界に変っています。光ばかりの社会はいかに老人が暮らし難くて、老人いじめの社会なのかという話になっています。面白い日本文化論のテキストにもなっています。これは昔からヨーロッパでも多くの人に普通に読まれています。ヨーロッパでも日本の伝統的な思想を学びたい人が昔から沢山居て、例えば哲学とか思想の系統の人たちであれば、世阿弥の「風姿花伝」はまず 100% 読んでいます。世阿弥は非常によく読まれている本になっています。

私の専門の哲学の分野では、20 世紀に入ると西洋哲学は入り口を間違えてないか、という思いがヨーロッパでは広がります。一般の人たちの世界で言えばまだまだヨーロッパは自信を持っていた時代ですが、哲学の方では 19 世紀に入った頃から、もしかしたらヨーロッパの思考様式はとんでもない過ちを入口の所でしているのではないかという議論がされる雰囲気には実は変わっていたのです。ヨーロッパ

の思考の仕方に限界があって、アジアにはもっと学ぶべきものが有るかも知れないとの思いを持って、仏教研究がヨーロッパで始まるのが今から 200 年ぐらい前です。仏教研究も最初は試行錯誤でしたが、今になるとかなりの蓄積を持っています。仏教用語の「無」とか「空」とか、普通にそのまま通用するので、特に訳さない方が良くなっています。禅宗の「禅」という言葉もフランスでは大変な人気で、T シャツにもプリントされて結構皆さんが着ています。仏教用語が一般に使われ始めているのです。一方においては、近代的な社会が作り出してきたいろんな問題点が意識されていて、哲学とか思想をやっている多くの人たちは、考え方を根本から考え直さなければいけないのではないかという思いをしています。その人達には、今、日本のものも影響しています。

ヨーロッパの考え方と日本の考え方の大きな違いは何でしょうか。ヨーロッパの発想は、全ての物事は突き詰めて行けばそれを作り出した大元に突き当たるという発想です。ギリシャ哲学の時代、2000 年前の時代には既に原子の存在が言われていて、あらゆるものの分析を続けて行くと一番の素になっている物は原子と呼ばれるものではないかと考えたのです。物事の奥にはそれを作った何かがあるのではないかという考え方です。科学というのはこの発想で出てきたのです。例えば、人間は何から出来ているのか。解剖してみると胃とか心臓とかで出来ている。それらは何から出来ているか。全部細胞からできている。細胞を調べてみて今では遺伝子というところまで来ているわけです。大元を探り出すと、大元にはそれを作り出した固有の何かがあるという考え方をしたのです。

宇宙を研究する場合には、宇宙は何によって作られているかという話になります。今では、宇宙はビッグバンによって始まった。ビッグバンの前にブラックホールが有ってこの世界が出来たと考えるようになりました。人間についての捉え方でも、人間の一人一人が例えば 100 人集まって社会を作るとか、或いは 100 万人集まって一つの国を作る、その元になっているのは一人一人の人間で、全ての物がその大元に固有のものが有るといふように考えてきました。

この発想がどこか間違っていなかったか、というのが一つの問いなのです。例えば人間の体を細かく分析して遺伝子を見つけたとしても、これは間違いではない。しかし幾らそれを調べても人間が生きている事とは何ですか、という意味は捉えられない。生きているという事は心臓が動いていて血液が体中に巡り細胞が生きているという意味でも捉えられますが、人間にとって一番重要な事はその様に生きていると云うことではなくて、「生きるってなあに」という方の生きている事、「私たちはいったい何の為に生きているのだろうか」、「人間には何か役目があるのだろうか」とか、そんな事を考えると幾ら遺伝子の存在が分かっても実はそれでは説明がつかないのです。

それは死ぬ事も同じで、時間の違いがあっても何時かは死ぬ事は誰もが知っている。死とは何かという事が医学に丸投げされているから、心臓が止まっているからご臨終ですとか、脳波が止まっているからご臨終ですとか医者の判定で終わっているのです。だけど実は私たちにとって重要なのは「死とどうやって付き合ったらいいのだろうか」とか「生きるとはどういう事なのだろうか」とか、そっちの問題の方が重要です。これは医学には分かりません。医学に生と死を決めてもらうようになると、「生きるとは何」とか、「死とは何」とか、「死とどう付き合うか」とか、こういう問題が逆に分からなくなります。

3. 幸せについて

幸せも同じ事であって、理論的に説明しようとするとは実は説明できなくなります。不幸せしか説明できない。例えば、戦争があったら不幸ですよとか、極端な貧乏は絶対に不幸ですよとか、あるいは困っているのに誰も助けてくれない、これは「不幸ですよ」というのは言えるわけです。世の中には幸福論を書いた本が沢山ありますが、これらをよく読んでみると皆不幸について書いています。こう云う事になると不幸になるという話をいろんな事例を挙げながら説明ができますが、「幸福とは何か」と書こうとするといろんな違いがあって書きようがありません。私の場合は子供の頃から釣りが好きで、川に行くと竿を出していれば幸せという人間ですが、皆に釣りをやらせても皆が幸せになるわけではありません。それぞれが違います。AKB48 のコンサートに行くと極めて幸せになる人たちが居ますが、私のようにそうではない人も居ます。幸せとはそういうもので説明が出来ない。従い、幸福論を書こうとす

ると結局不幸を書くことになってしまいます。

しかし、「幸福とは何か」とは実は皆知っているのです。自分の経験の中でも振り返ると、「あの時は幸せだったな」このような感じは誰でも持っているでしょうし、心の奥底では幸せを誰もが知っているものなのです。ところがその幸せを言葉で表そうとしても何とも説明が付かないのです。そして私たちの社会で一番大事なものは「幸せ」なのです。もしも世界中の人たちが幸せな生き方をしていたら何も言うことは無いわけで、社会を変える必要が無いし面倒くさいことを考える必要も無いわけですが、そのぐらい大事な幸せの中身が実は説明をすることが出来ません。その事を表しているのは、「実は人間達にとって一番大事なことは何時も説明出来ない」と言う問題なのではないかということです。

例えば、「生きるとは何か」これは明確な説明が出来ません。キリスト教とかイスラム教の熱心な信者さんは經典にある内容で説明出来るかも知れませんが、私のような日本の一般的な人間にすると、書いてある本が有るわけでも無いので、結局は説明ができません。

それでは説明できないものとは何なのでしょう、その関係の中で何となく分かるものです。例えば「幸せ」は、自分だけで作ることは出来なくて、何かの関係の中で感じるものです。場合によりますが結婚して夫婦の関係が出来た、毎日自宅に帰るのが楽しいと感じる様になる、そこに幸せがあります。或いはお子さんが出来た、親子の関係が出来た、そこに幸せを感じるということが起こります。私が魚釣りをやっていたら幸せというのも、魚釣りをしながら川との関係を作ったり自然と関係を作っている。その関係の在り方が私には良いものとして感じられるからです。結局ある種の関係が幸せを作っている。だから「幸せ」というのは「関係」の中に実は在るのです。感じ取るのは私だったり貴方だったりするのですが、幸せは私の中にも貴方の中にも無く、その二人の関係の中に有る。時には二人だけでは無く、皆で地域の活動等をしてそれが有る程度うまく行った時や、皆で「ご苦労さん今度は良かったね」とかお互いに話し合い、皆で幸せ感が共有される。この場合でも皆でやった関係の中に幸せが発生しています。それを感じ取っているのは個人ですが、幸せのある場所は実は自分の中ではなくて、関係とか結び付の中に有るということです。

普通自己紹介は、何年に何処で生まれ、何処の学校を卒業して、何処に勤めて、どんな仕事をしています、大体こんなものですが、この自己紹介は「私の中身」を説明していません。「私の中身」を紹介しようとする、大変な困難に陥ります。認識している自分が正しい自分かどうか分からないからです。人間は自分に対して幻想を持っています。自分を正しく紹介するには間接的に説明する方法があります。自分が今どういう関係の中で生きているのかを思い付くままに並べてみることです。

私の場合は上野村での暮らしの関係があります。自分の「山」との関係では、山から木を切って薪を作っています。炭窯で炭を焼くことも稀にあります。木の子とか山菜採りもあります。ツツジの咲く頃には山頂まで歩くこともあります。松茸を取りに他の山に登ることもあります。山には種々の動物たちがいますので、動物達との関係とか。自分の畑との関係、村の人々との関係とかを説明してみることです。更に私の場合には東京での暮らしの関係もあります。自分が今どんな関係を作って生きているのかを説明してみる。そうすると多分それを聞いている人達は、「この人はこういう人間なんだ」と、大分理解出来る。これは何を意味しているのかというと、私という者が予め在るわけでは無い。私が作り出している関係、或いは私が関わらせてもらっている関係、その関係の中に私が居て、その関係の合計が私という人間なのです。

それを、予め私が在ると考えたのが西洋の思考だったのです。大元になっているのは個人個人の人間となっているのです。でも、それは違うのではないかという感じになって来ていて、寧ろ関係が私たちを作っている。

そう考えると今の社会で生きているのですから、全て立派な関係の中で生きているわけではありません。例えば、出来ることなら相手に協力しようとする関係の中で行こうと思っても、現実にはそこまでやってもらえないという事がしばしば起きます。本当はこうすべきだと分かっている、それが出来ない関係がしばしば発生します。自然との関係を出来るだけ良くしようと思っても、都市部で暮らしているのは、そういう状況でも無いということでしょう。本当はこんな形で森と付き合うのはまずいという事が分かっている、急がざるを得ないのでこうさせてもらう、みたいなことが起きま

す。私たちの関係の中には、胸を張って説明できる関係も有るでしょうが、実はちょっとまずい関係になっていると思わざるを得ない関係もあるのです。

そのまずくなっている関係を、もう少しましな関係にする。それが変革するという事です。それが出来ると自分も変わって行きます。例えば、もし仮に家族の関係が凄くまずいという場合には家族の関係をもう少し良くするように努力する。それが出来たならば、その時には自分も変わっているということに多分なるでしょう。それから自然との関係が凄くまずいという事がもし起きていれば、自然との関係を今よりも少しでも良くする。そうすればその時には多分自分も変わっている。だから自分を変えようとする場合に、一生懸命考えて変えようとしても、変わりません。自分が今どういう関係の中で生きているのかを良く考えて、その中で取り分けどうもこの辺がまずそうな関係だと発見したら、それをちょっと修正してみる。その時に、その修正に成功すると、既に自分は変わっている、そういう感じだろうと思います。だから、関係が本質を作るという発想であって、しかもその発想というのは日本人たちが昔から持ってきた発想です。

例えば、神とか仏とか言った場合も、神が居るとか仏が本当に居るといふこととはちょっと違います。私がお祈りして神様と関係を持つ、あるいは私が仏さまと関係を持つ、その関係が有るから神や仏が存在する、そういう捉え方です。自分の家族が亡くなった場合に、家族がもう灰になりましたと考える人は非常に少なく、亡くなっても私の傍に居てくれる、まだコミュニケーションが取れる人としてどっかに居る、時には守ってくれる、応援してくれることもある、年齢に関係なくそういう感覚を持っています。この間のオリンピックの時にも、勝った選手の中で、亡くなったお母さんが応援してくれたお蔭で勝てましたと言っている人が居ました。そう感じているのです。それは科学的には説明できません。その人たちからすると、亡くなった人との関係はその後も続いていると感じている。その関係が続いているからその人は今でも存在している。初めに魂のようなものが有って、それと結んでいるということではないが関係がある以上は相手側も存在する、それが日本の捉え方なのです。

4. 現代哲学と日本思想

西洋哲学とか近代の考え方は、全ての物の奥には大元の個体があるとする考え方、個体還元主義とも言いますが、全ての物は論理的に説明できるという考え方、全ての物は合理的に説明できるという考え方、更にはそこには人間中心で物を考える発想が有る。この全てが大きな誤りをしたのではないか、そういう感じになってきています。関係を通して物事を捉えるという日本の考え方は、論理的にも合理的にも説明できない。更に今、私たちは人間中心の発想から自然を含めて物を考えようとする発想に切り替えようとしている。そうなってくると、この日本の伝統的な物の考え方は欧米の人たちから見ても魅力的なものに感じられる時代に転換してきた気がします。

近年亡くなりましたが、フランスの文化人類学の頂点に立った人でレヴィ・ストロースという人が居ます。世界的に有名な哲学者でもあります。フランスの中でも高い評価を得て最高の地位を得ていたので、自分の生きる場が有るはずですが、何となくあの人の文章は自分の本当の場所が無い人なのです。彼はフランス国籍のフランス人なのですが、人種的にはユダヤ人の為か、学校を出て非常に優秀だったようですが差別されていて、国内に仕事が見つからなかったようです。その時にブラジルの大学から呼ばれて、ブラジルのアマゾン先住民の研究をやっていました。そしたら今度は、フランスがナチスドイツに占領されて帰れなくなったので、アメリカへ亡命してアメリカ先住民の研究をしました。戦後になって遅れてフランスに帰って来て、それから彼の研究が評価され最高地位を占めました。戦後は決して不遇な人では無かったのですが、何となくフランスが私の生きる場所という感じがしない。待遇はされているのにここに本当に生きる場所が在るという感じがしない、そういう人でした。彼はユダヤ教の世界からは若いころに離脱しており、人種的にはユダヤ人ですがユダヤ文化の中で生きている人では無い。だからユダヤの世界にも彼の生きる場所が無い。本当の意味で生きる場所を持っていた先住民達の研究にのめり込むところがあつた。あの感覚というのは現代人にかなり共通するというか、私達も生きる場所が無いわけでは無い、家族もいるし場合によつたら仕事も持っているし、世間的に言えばちょっと余裕のある生きる場所を持っているかも知れない。でもこれが自分の生きる場所かと言われると、

何か違うような気がする、本当に生きる場所が無いような気がします。大なり小なりその感覚を現代の人間たちは持っているようです。

彼の晩年の本で、自由・平等・友愛という一つの理念を打ち出した 1789 年のフランス革命について、〈市民革命自体はイギリスなど早くからあるのだが、近代の理念を高らかに謳いあげた、特に自由、平等という考え方は近代社会の基本理念であり、これを打ち出した事でフランスという国は世界から独特の地位を得る入り口を作った。ただし、後世の歴史家は多分そういう書き方はしないだろう、フランス革命こそは世界を破壊した始まりであると書くことになるだろう〉というようなことを言っています。つまり正にフランス革命から人間中心主義の時代に移って行きます。ヨーロッパは基からそういう根をもっていますが、それが極端な所まで行ってしまい、合理主義が世界を支配する時代に向かったし、そうこうしている内に人間たちが生きる世界が滅茶苦茶に破壊されてしまいました。ちゃんと生きているのだけれども、なんか本当の生きる世界が何処かで壊れている、そういう時代を作ってしまった。だから、生活に困った状況に陥っても誰も助けてくれない社会がそこに在ったり、皆バラバラになり孤立してしまう社会になってしまった。まだ強さを持っている時には自分で困難を突破できるが、自分が弱い場に立たざるを得なくなった瞬間たちまち破綻してしまいます。そう云う社会では何が大事なのかさえ人間が判断出来ない様になってしまいます。〈この始まりの大きなイベントはフランス革命だった〉と後世の歴史家は書くだろう、〈近代は偉大な変革ではあったけど、それは偉大な敗北の始まりでもあった〉と彼は捉えています。

インタビューの中で、フランス革命以後の世界をもう一度大変革するような思想とか理念とか出て来ますか、再び出てきたとしてそれを実現する動きが出て来ますかとの質問に、レヴィ・ストロースは〈既に出て来上がっている世界を根本から作り直す事は、極めて困難であることは分かっていますが全く望みを捨てているのではありません。ほんの僅かかも知れないが可能性は有ります。もし近代の問題点を克服するような新しい哲学が登場し、しかもそれが社会の動きと繋がるのが有り得るとすれば、それは恐らく日本からでしょう〉と言っています。彼は何度も日本に来ていますが、彼の目から見ると日本は一面では世界に冠たる近代化した国で経済も発展しているが、日本人達の精神の中には伝統社会の精神がまだ残っている。「亡くなった家族が応援してくれた」と言うような事が断固として残っている。気が付けば何処へ行っても神様、仏様が祭られており、それを見て手を合わせて歩いている。この風土が作り出してきたものをどこか大事にしている。更に言えば、関係こそが本質を作っていて、関係によっていろんな個別の物が発生しているという捉え方、そういう精神構造を持っている。日本の社会は壮大な近代化をしながら、長い人類史が作って来た精神世界をまだ完全に消し去っていない。両面を持っている珍しい国、だからそういう所に住んでいる人達から新しい哲学や思想が出て来る可能性があると言っています。

人間達が生きて行く過程は素晴らしいと教えたのは西洋の思想です。日本では実はそんな風に教えなかった。人間達は生きて行く過程で自分の魂を汚していくと思っていた。関係の在り方で理想的な関係は「自然（じねん）の関係」、自らの関係、今の言葉で言うと自然（しぜん）の成り行き、春になったら木が芽吹き、秋になると紅葉しその後には落葉する。春には虫たちが出てきて卵を産んで亡くなる。翌年春にはまた出てくる。こういう自ずからの関係が大事でした。自ずからのままにもし全ての事が進めばそれが無事だという事なのです。こういう有り様こそ理想の関係があると日本の人間達は昔は考えていたのです。だから「無事がなにより」という言葉があったのです。

ところが人間は自らのままに生きることが大変困難な動物です。人間は自分を持っているので自己主張をします。自分の目標とか目的を持ちそれを遂げようとします。競争をしたり、他人の足を引っ張ったり、極端な例は戦争を始めたりします。自ずからのままに人間たちが生きることが出来れば無事な社会になって良いのですが、人間が自分を持っているが為に自己目的の様なものを持ちそれが事を起こしてしまいます。それが有事になります。事を起こす事によって様々な困難をこの社会にもたらします。

この辺が西洋思想と日本思想の根本的な違いです。伝統的西洋思想では、「人間は欲望を持っていたり自分を持っているから、目的を実現しようとして文明を発展させてきた」、と肯定的な捉え方で

す。ところが日本の伝統的考え方では、そう云う風なものを持っているからろくな生き方が出来ないと
言う様に逆に考えます。自分が主張することも無く、毎日息をしているのと同じように自ずからのま
まに生きることが出来れば、無事な世界が出来るとし、そうすれば自分の心も乱れることが無く、無事な心
を持ち続けることが出来たはず。ただそれが出来ないのが人間です。それで、時々そういう自分を消
し去ろうとして修業します。禅宗では座禅を組み、浄土系では一心に念仏を唱える、修験道系では山で
修業をする。やり方は色々ありますが、全て共通していることは、激しい修業をしながら自分を消し去
り、主張をしない自然のような人間になろうとします。

しかし、人間が自分を完全に捨てるということは出来ません。だから日本の思想は人間の悲しさを見
つめて行こうと言っています。人間はいいも悪いも自分と言うものを持って生きている。それを捨て
られずに生きている、それは本当の生き方ではなくて悲しい生き方をしている。その様な捉え方で人間
を見る。人間は素晴らしき人生ではなく、悲しき人生を持っているという風に捉えてきた。逆に言えば
そういう風に人間を見ることによって、人間達が茨な社会を作ってきた。悲しさが無い物は自然の側
に有る。自然は自らのままだに生きている。だから真理を実現しながら生きている、と考えました。そこ
には悲しさが無い。人間は自分という余計なものを持っているために悲しい生き方しか出来ない。だから
真理から外れる。それが魂を汚すという意味合いです。

人間が死んで行く時には綺麗な魂で死ぬわけではなく、大なり小なり汚れた魂で死んで行くという
捉え方だったのです。群馬県片品村の一集落に、念仏講の人たちが昔からやっている亡くなった人を送
る行事があります。全員黒装束で、今にも亡くなりそうになっている人の周りを囲んで、和讃を唱和し
てあの世に送ってあげる行事です。その後半の部分を聞いていると、「今、近くの山の山頂に阿弥陀様
が迎えに来てくれている。阿弥陀様の前に霧が立っていて貴方には阿弥陀様が見えない。その理由は
霧が邪険だからではなく、あなたの心が邪険だからです。」と。生前に何か悪い事をしたわけでは無い
が、自分を持って生きてきた以上はどこか魂に汚れがあるに違いない。開き直ってあの世に行っ
てはいけませんよ、汚れた魂を綺麗にして欲しいという気持ちを持ってあの世に行きなさい。その
時に阿弥陀様が救ってくれる。と、亡くなる寸前にもう一度教え諭しているのです。自然は自ら
生きている、だから真理を実現する方向で生きている、だから人間には無いものを持っている、
だから其処にこそ真実の世界があり正しい世界がある。それが日本の自然信仰です。

5. まとめに代えて

森との幸せな関係も一樣ではない。上野村の人間としての森との幸せな関係もあれば、林業を生業
にしている人たちの森との幸せな関係もあるし、私のように林業以外の人間の森との幸せな関係も
あります。人によって違います。そんな事をどこまで許容しあえるか。それらを通して様々な問題
を考えて行かねばならないと思います。

【質疑応答】

Q: アジアの中での日本の独自性についてお聞かせください。

A: 日本は大体 150 年前から近代化が始まります。初めの 100 年間は技術、生産とか経済等の面
で比較的ゆっくり変わって行きましたが、最近の 20-30 年間はアツという間にインターネットが
当たり前になり急激に変わりました。時間的に余裕を持ちながら近代化して行った国は古いもの
も消え去らずに残すことが出来ますが、急激に近代化すると最近の動きの中で近代化すると、
変動が激しくて古いものが残る余地が無く伝統的な物がどうしても破壊されてしまうの
です。そういう点では日本には有利です。もう一つ、日本と似たような思想を持つてい
るアジアの国は、台湾、フィリピン、ベトナム、これ等横へ行く三日月ルート、この先
を上げますとチベットです。ある種共通性のある考え方を持つてい
る地域と考えています。中国の儒教は西洋思想に近いのです。非常に合理主義です。第一、
「合理主義」という言葉は儒教の言葉です。儒教圏では良く説明できないことを大事に
するという発想はありません。合理とは全て理で説明できることを意味します。そうい
う思想なのです。儒教文化圏は西

洋思想に近く日本とは極めて異質です。ところが最近の韓国では、急激な発展により、伝統的な儒教系の発想が急激に衰退しました。その結果、可也日本に似てきました。同じ事は一部中国の若者にも起きています。今の中国共産党の体制は儒教の発想で支配しているようなところが有るので可也異質なところがあるように思えます。

Q:「日本人はなぜキツネに騙されなくなったのか？（先生の著書）」。これは、精神的なものの喪失があったということでしょうか？

A: 高度成長がキツネに騙される能力を人間から喪失させたということです。キツネに騙された話が日本の社会から消えるのは 1965 年です。殆ど日本中同じです。高度成長から生活が変わって行く時期で、ものの考え方も変わって行きます。

Q: 自然という言葉と本心というものは同じでしょうか？

A: 本心とは人の本当の考え方ですし、自然は「自ずから」ですから違うと思います。本心は、現象が出てきた時に初めて分かるものであって、出て来なければ自分にも一生分からない可能性があります。

Q: 自由とか人権は普遍的な価値があると良く言われますが、先生はどのようなご理解でしょうか？

A: 私達が自由、平等、人権という言葉を使う時に明らかに矛盾する二つの言い方をしています。明らかに人権無視が行われたり、自由が損なわれたり、世界中そこら中にあるわけで、これは大事だからしっかり向き合って守りましょう、とそうせざるを得ません。その一方において、哲学の世界では自由とか人権の考え方は、あれではだめだという捉え方もしています。自由とか人権というのは、元々キリスト教から出てきている発想で、神が人間に与えた権利の中にある。但し、それは神が人間に求めた義務を果たす限り与えられるものです。キリスト教の場合には、クリスチャンとして真面目に神を信じている者に対してキリスト教徒としての自由が与えられます。それが近代になると、人間は生まれながらにして権利を持っているという捉え方になります。本当に人間の持っている権利は、実は歴史的にどんどん変わって行きます。近年ですと、女性の権利が強く言われるようになっていきます。障害者の権利とか、絶えず発見されてはこれが権利という話になってきます。発見されないものは何時までも置き去りにされることでもあるわけです。

基から人間にそういう権利が有るのか、発想の仕方が間違っただのではないか、という意見があります。自由とは夫々が自由に生きることが出来る関係をどう作るかという事であって、予めの権利ではないのではないか。私には権利が有ると言っても解決がつかない。自由が欲しければ自由になる関係を作る。社会も同じで、社会の人達は自由な関係とは何処に有るのか、どうやったら作れるのかを考えなければならない。平等も同じで、平等な関係がどうあるのかという事なのであって、平等は権利と言っても何にもならない。近代のそういう考え方はキリスト教時代に発生したものを、神様を除外して社会理論として作り直すという形で西洋思想が出来ているので、だから自由の権利の様なものも自由の義務と一対で、国家としては、国民は自由の義務を果たす限りにおいて権利が与えられる。国家が求めて来る国民の義務とは納税の義務です。日本の社会は税金を払わない国民には一切の権利が認められません。結局は義務の内容も権利の内容も国の政治が決めるようになっているのです。

人権団体でも、人権無視の現実があるから取敢えず人権は重要だと私たちは言っていますが、人権という権利が有るとは言いますがその中身は国家が法律で決めていて、人権が欲しければ税金を払えという仕組みになっています。お互いが尊重し合える関係はどうなったらよいのか、これは関係の問題です。その関係の問題を考えないで予めの権利にしてしまった瞬間、そのための義務も発生し、しかもそれは政治家たちが決めるという感じになってしまっている。それは実におかしい。そういう意味で、近代の人権とか自由の権利とか平等の権利とかという捉え方がもう古いのです。どういう関係作りをやるか、そこへ持って行かないとだめなのです。そういっても現実には人権無視が起きていますので、それに対しては人権は大事ですと我々は言っています。これは矛盾したことを言っています。

ただ今の時代は矛盾したことを言う勇気も必要です。例えば今の時代は 40%の人が非正規雇用、どう見ても不当ですが、もう一つ言えることは企業で働くことが本当に幸せですか、こういう疑問を持つ若者が増えています。企業で働くことが人間に幸せを齎すのかどうか、しかも企業の中身が刻々と悪くなってブラック企業が増えている、勤めても直ぐに首にする、そういう企業に正規採用されればそれで問

題解決なのか、人間が働くというのはいったいどうすることが幸せなのか、働くことと暮らす事はどういう風に繋いだら良いのか、とかそっちも考えなければならないのです。一面では正規雇用をやりなさいと言いながら、片方では正規雇用されたからと言ってそれで問題解決では無い、とこっち側の発想も必要なのです。今はいろんな矛盾したことを勇気をもってせざるを得ない時代です。

内山 節（うちやま たかし）先生のプロフィール

1950年東京都世田谷区生まれ

哲学者 元立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 教授

NPO法人「森づくりフォーラム」代表理事

1970年頃から、東京と群馬県の山村、上野村との二重生活をしている

「内山 節著作集」（農文協）、「自由論」（岩波書店）、「「いのち」の場所」（岩波書店）、「文明の災禍」（新潮新書）、「新・幸福論」（新潮選書）、「日本人はなぜキツネに騙されなくなったのか」（講談社現代新書）などの著書がある